昭和48年度蓬田中学校卒業式

卒業者

小松孝充　小鹿和男　古川正美　工藤徳光　工藤一久　木村義則　北畠　三治　大柿雄　稲崎文雄　石崎辰志博　青森国郎　八幡久雄　宮崎幸雄　三上政正　三上昭夫　細谷正雄　福井俊美　八戸茂次　八戸正春　八戸弘武　張間雅幸　張間秀純　張間千佳光　久慈徳男　久慈真博　久慈俊治　工藤則悦　小川正光　越前武雄　古川武一　鎌田貴弘　小柿均志

川崎み　柿崎郁や　遠藤恵子　八幡修子　福井信子　福井一　広田等　八戸治　八戸満　八戸男　八戸彦　八戸男　名古屋梅一　中野武勝　津島友範　田中正男　武井岩男　武井富仁　越前牧春　小泉俊一　久慈健聡　川内敏平　柿崎秀樹　柿崎健一　泉谷陸　青木敬　能沢隆之　吉田睦男　八幡昭夫　八幡武秋　松本松男　八戸孝彦　八戸弘行　津島功一　田中真　坂本良彦　佐井彦

蓬田村公民館報
（蓬　門）第89号
発行所
青森県東津軽郡
蓬田村公民館
印刷所
㈱新印刷興業

＜世帯と人口＞

世帯数		1,001
人口	男	2,331
	女	2,418
計		4,749

（49．2.28現在）

「蓬　門」原稿募集

「蓬門」の原稿を募集いたします。どんな事でもよいです。原稿を送って下さい。

原稿送付先
蓬田村教育委員会

木村千里子
木藤佳美子
工藤千恵子
小松うめ子
坂本百合子
坂谷弘子
細田温子
高村尚子
中川秀子
中田みき子
藤田栄子
八幡恵子
八幡静代子
八幡智美子
吉崎智子
青木美穂子
青木リ子
青田道子
飯田英子
加藤豊子
川崎富士子
木戸喜恵子
木村文子
工藤良子
倉谷美穂子
越田礼子
田中智恵子
田中千恵子
田中英利子
藤上洋子
村田陸子
森八幡豊子
吉木英子
青田弘子
柿崎五月子
川地姫子
菊崎千枝子
木野田ふじ子
木村智賀子
小鹿秋子
小鹿道子
越田昌子

佐井俊子
坂本文子
佐藤久子
高田志磨子
高山百合子
八戸弘子
藤田京子
三上あけみ
山館直子

男六十三名、女五十四名、計百十七名

昭和四十八年度
蓬中卒就職生激励会開く

三月十一日午後一時より役場会議室にて蓬中卒就職生激励会を開催し村長始め来賓の方から一生懸命頑張るよう励しの言葉を受け最後に就職生代表より蓬中の名をはじかしめないよう頑張ると誓い村長より記念品を贈られ閉会した。

就職生次の通り。

氏名	部落	就職先
宮田幸正	蓬田	東京都
八幡修一	高根	愛知県
泉谷　陸	長科	東京都
川内敏平	阿弥陀川	横浜市
越田俊春	瀬辺地	群馬県
木村義則	蓬田	青森市
青木国雄	阿弥陀川	青森市
佐藤久子	長科	愛知県
飯田道子	瀬辺地	福井市
木野田富士子	瀬辺地	福井市
八幡千代子	高根	大津市
八幡豊子	高根	大津市
菊地姫子	高根	岐阜県
藤田みき子	阿弥陀川	愛知県
森　陸子	阿弥陀川	愛知県

以上十六名

▽―▽△―△

大和（一）
飛鳥路

豊水

万葉のふるさと、日本建国の地飛鳥路へ、毎々心は飛んでおったが中々その機会を捉えることが出来ずモタモタしているうちに馬令を重ねるばかり、内心イライラ病の岸辺に彷徨っているようであった。

今回やっとそのチャンスを得たわけで、チャンスは待つものではなく自ら得るものであるとの言葉を泌と体得したようなものだった。

毎年その附近まで足を運ぶのですが交通図をみても古墳、陵の詣でとが寄り道でとても私の歩行範囲では及ぶものでなく多少さじをなげてきたことは結論づけられる。

昨年は法隆寺から薬師寺へ廻り、白鳳時代の再現、薬師寺の金堂建立の工事現場をみて今だ古代の宮大工の存在することを感じとることが出来た。

百万巻の写経を収めるとこは近代的防火及永久保存し、薬師像三体も安置するようになっており、他はオール木造で古代再現の建築であり、用材は台湾桧と云れている。写経場は別院で般若心経を特製の和紙に写経して収めるようになっておる。私は約四十分位で写して収めてきた。

「青丹よし平城（奈良）の都はさく花の匂ふがごとく今さかりなり」万葉集古都、京、奈良はどなたでも多少にかかわらず感触はあるはずであろう。

今回の私の目的は古代文化を解明する力など勿論なく、建国の歴史を極める微々たるものもなく、なにかしら私の胸に響くなにかを得ればよいだろうといとも漠然と乗り込んだのは偽ざる気持であった。

武井己之吉、武井石太郎両先輩の同行で心強かった。飛鳥盆地は奈良盆地に続く小さい盆地で別に大和盆地とも言われている。

桜井市からは国道一六九号線を通り橿原市から明日香村へ出る。

明日香村はどこの農村でもみられる風景で千四百余年前飛鳥文化を今日まで伝えた藤原宮の歴史の跡とは思わぬひっそりとした佇であった。

一六九号線から横丁に入ったたんぼの細い道を通って高松古墳に至る正確な地名は奈良県高市郡明日香村大字平田字高松の国有地の竹やぶの中にある小古墳である。

せまい駐車場の向側の小高い丘は文武天皇陵でそこからみかん畑の中の細い砂利道を通り一〇〇米位で古墳に至る。

竹やぶの中にこんもりした円墳で横口式石槨（かく）と云われ発掘の後に角材を以って侵入を防いでおり角

の間から覗くと石槨だけがみえている。

「古墳内部の石壁に白虎、青竜、男女像の極彩色で描かれ法隆寺の壁画に匹敵する」（毎日新聞四七、三二七）と発表しておる。

発見以来学界をあげ調査研究が進められ今日に至るも未発表の数々のものが残されておるようだ。一人の管理者がいて発掘の経緯をきくと、古代から古墳とされ伝えられてきている、よって国有地として残されてきた。発掘の直接の動機は明日香村史編さんでその準備のためこれまで明らかでなかった古墳を発掘調査したのだと云う。

かって江戸時代に文武天皇陵ではないかと考えられたことも補足して語った。

発掘してみるとかなりの古い穴があり穴は長い年月を経て土砂で埋っておるが明かに盗掘されておることは確かとなりこの分だと遺物など持去られておるだろうと発見者は述懐し、その通り遺物も少なかったと語ってくれた。

築造年代は今だはっきり公表の段階でなく推定年代を考察中で、従って被葬者は誰なのか判っておらず壁画の衣、冠、もち物等からみて学者のこれからの研究課題とされておる。（日本の歴史）丘から眺める飛鳥盆地は丘々の裾から広がる水田は段々水田で小さくなんの改良を加えた後もなく古代からそのまま引継かれてきたように見受けられた。

この耕地をみても生産性は高いと考えられず明日香村の経済をなにによって支えられておるのか調べる時間がなかったことは遺憾であった。

丘から丘を結ぶたんぼのあぜ道で普通車がやっと通れる曲りくねった細道でこれも古代からのままのようだ

高松塚の近くに天武、持統両天皇の合葬された檜隈大内陵（ひのくまおおち）がある。天皇の陵は多少の差があるが同型である。

正面に小さな鳥居を建て廻りに玉砂利を敷き、木の塀を巡らして一般の人は入れないようになっておる。

持統天皇は女帝で天武の皇后で天武天皇死後即位している（日本の歴史）よって一つの陵に葬ったと思われる。それから飛鳥寺へ足を運ぶ。現在の飛鳥寺は当時の規模からして二十分の一にせまめられている。

橿原市考古研究所の手によって附近の水田を発掘調査したら当時の広大な寺の跡と数々の遺跡が発見され当時の面影が立証されておる。

日本最古の寺としてひっそりと古代を物語っているようだ。

境内には蘇我入鹿の首塚と伝えられる石碑があり。入鹿はどこに葬られたか明かでない。

「日本書記」像によれば欽明天皇十三年（五五二）百済（くだら）の聖明王が仏経論を献じ我が国にはじめて仏教を伝えたと言われている。

八世紀ころの文献によると仏教の伝来は五三八年とありこの方が正しいようであるが、いづれにせよ、ほぼ六世紀の中頃に仏教が伝えられたことは確であると「日本の歴史」が書いている。

飛鳥寺の造営に百済（くだら）工人が参加したというが、そのことは出土品からみても、百済から出土したものと近似していることなどで裏付られる。

推古朝三年高句麗（こうくり）から曇慈（えじ）という僧が帰化し太子の師となり、同年百済から慧聰（えそう）という僧が帰化し、飛鳥仏教は百済、高句麗の二僧によって支えられていたのである（日本の歴史）皇室や豪族の帰衣と保護によって次第に隆んになり各種の仏教芸術が生みだされ、古墳に代表される文化は面目を一新してきたのである。

推古朝から聖徳太子死後蘇我一族は更に勢力を得て、馬子が没しその子蝦夷が大臣となり皇極朝（女帝）六四三年に蘇我入鹿が斑鳩宮（いかるがのみや）を襲い聖徳太子の長子山背大兄王（やましろのおおい）やその一族を滅している。

それから二年後中大兄皇（なかのおおへのおおじ）中臣鎌足（なかとみ）二人が相謀り入鹿を板蓋宮（いたぶきのみや）に誘い入鹿を斬殺し中大兄王らは蘇我一族を滅した飛鳥寺に陣を敷くが蝦夷は自邸に火をかけ自殺蘇我一族は滅びるのである。（六四五、大化一年）

我々小学校の頃の国史（国定教科書）は中大兄王と中臣鎌足は入鹿を誅すとある。（誅す、罪悪のものを殺す）当時の歴史は入鹿は罪悪人とされており。近代日本の歴史はいづれも殺すとあり、殺すと誅すは大きな異なる意味を以っていると思われる。蘇我馬子は五九二年崇峻天皇を殺し推古女帝を即位せしめ孫の入鹿が山背大兄王を殺しておる点からすれば当然罪悪人であることにはかわりない。

蘇我一族は大陸の文化を取り入れ仏教を広め飛鳥仏教美術を基調とする文化を興したことは評価すべきだと思れる。

蘇我一族は滅びここで年号を大化と改め世に大化の改進と云れ律令国家となり屯倉（みやけ）が設定され統一集権国家が誕生するのである。

憲法十七条は推古朝（太子摂政）十二年（六〇四）発布されたとしているが推古朝でなく大化の改進以後のものだとする幾つかの偽作説を唱いる学者がある。

私の小学校の頃は聖徳太子が憲法十七条を設定し大化の改新となる。今なほ記憶にある。

大化の改進は年代表からみれば六四五年皇極女帝、中大兄王が入鹿を殺し、左右大臣、内臣、国博士を置き官僚制の強化を計り律令官僚体制の官人法基本となり年号も大化と改めてゆく。

偽作説の論拠は推古朝時代は律令時代より前に官人制を前提とする法が説かれるわけがないと云っておる。

いづれにしても今後の歴史学者に残された論点として興味あることである。

大化の改進は国家権力、中央集中権力の源泉となり、政治の中心となる歴代の皇居が大和盆地の南隅飛鳥の地であり、平城（奈良）遷都まで飛鳥文化の華を咲かせることになる。

飛鳥路の随所に散在する古墳、陵は古代の激しい変動もなにごともないようにひっそりとなにかをみつめておるかの佇いが印象づけられた。

飛鳥川 川淀さらず立つ霧の 思い過ぐべき恋にあらなくに。

（万葉集）

正法院訪問記

木村 慎一

〝不童酒入山門内〟の石塔を左に見て、この禅寺の山門をくぐるのは二度目である。

初めは、今から約十年ほど前、その昔円空が彫ったといわれる仏像を拝観させてもらうためであった〝菩薩座像「江戸時代作」〟として、昭和四十一年に、県重宝に指定された木彫のことである。

このたびの訪問のねらいは、本堂に掲げられてあるという俳句掲額を調べるためであった。たまたま、公民館長の坂本さんに、このことを知らされてから、わたしは楽しみに機会を待っていた。

三月上旬のある日、車をおりたら濡れ雪が肩にかかった。カメラを首にさげ、ノートやら年表やら、そのほか郷土調査七つ道具のはいった紙袋をかかえ、わたしは庫裡の戸をあけた。出てきた少年に来意を告げた。すぐ、お住職さまが現れた。竜沢山正法院十三世奐嶺師は、法衣に身をつつみ、禅僧らしく端正な姿で静かにわたしの前に立っていた。

—さあどうぞ。あちらの方から上がってください—

ことばは少ないけれども、いんぎんに招じ入れてくださる。

わたしは地方俳諧史に興味を持っており、この地域に残されている古

い俳諧資料を収集して、系統的に位置づけてみたいと考えている。

さて、正法院の俳句掲額は、入って左、須弥壇（しゅみだん）側に面して、高い梁に懸けられてあった。掲額の大きさは、横に約二メートル五十。たて約一メートルで、板にはられた紙の上に、八十三の俳句が書かれていた。紙が半分くらいはげているので、全句を解読できないのがとても惜しまれる。しかし、献句者のほとんどの雅号が読みとれるし、さらに、その地域の村や町の名が、雅号の肩に書かれているので、わたしにとっては貴重な資料の一つとなった。

この俳句掲額は、―故卿々庵句仏大祥忌追悼―と題している。右端に明治三十五年、五月十二日と日付けが書かれている。

わたしは、卿々庵の門弟が、蓬田辺りまで広げられていたことを知って、なるほどと思った。油川熊野宮にも、―卿々庵先生郎―と題した雑俳（ざっぱい）掲額があったことを思い出したからである。

卿々庵（そうそうあん）は、明治前半における弘前俳壇の第一人者で発句や、雑俳の師匠として著名な人であった。身分は、箱館戦争に参加したこともあるという、れっきとした二百石取りの元弘前藩士である。本名を千葉胤任という。卿々庵の俳諧の師は、弘前の三谷句仏である。句仏は町人の出であるが、仙台の松窓乙二から、正統的な俳諧である蕉風俳諧を伝受されたことがあり、津軽俳諧史上の貴重な存在である。句仏は寛政のころから作句活動を初めている。句仏にしろ、卿々庵にしろ彼等は、請われるままに、津軽の各地へ俳諧の指導に行脚（あんぎや）したものであろう。三谷句仏の献句は、油川明誓寺の、天保四年の俳諧掲額にもみられる。

句仏の高弟であった卿々庵は、師から同じ雅号を使うことを許されたが、一般に卿々庵として知られている。

思うに、津軽の俳諧は、寛政のころから明治前半まで、三谷句仏と千葉卿々庵の影響を、多かれ少なかれ受けていると言えよう。卿々庵は、明治三十三年、六十八才で亡くなったことになっている。

正法院掲額の主旨は、詞書き（ことばがき）に述べられているわけだが、大部分剝落（はくらく）しているので完全には読み取れない。およそ判読してみれば、―師匠卿々庵が亡くなってから三回目の命日にあたり、教えを受けた門弟一同が、師匠の霊をなぐさめるため句を献じ、それを一枚の額に収めて正法院に掲げた―ということであろう。

掲額中の最初には、句仏の句があり、その次に琢庵の句が見えている。琢庵は、正法院十世琢宗の法弟である。十世の琢宗は、明治六年から同四十年までの正法院住職であったから、この掲額が懸けられた明治三十五年は当時者であったわけである。そしてまた、琢宗和尚も俳諧に無縁であったとは考えられないのであるいは詞書きの執筆者でもあり、判者でもあった夏雪がその人であるかも知れない。

八十八翁祇年とあるのは、幕末から明治前半における青森俳壇の総帥浅田祇年のことである。名を理助といい、菓子舗「甘精堂」の創設者でもある。ただ彼は明治二十九年に亡くなったことになっているが、この掲額から察するとまだ生存していることになる。

門弟の地域的な広がりを示すと、今別、大泊、蟹田、中沢、小橋、油川、青森、尾上、五所川原、弘前、藏舘、大鰐、秋田まではいっている。

掲額に〃施主〃とあるのは、今日でいう発起人のことで、この人々は地元阿弥陀川の俳人たちであろうと思われる。梅庄、観山、春耕、紫紋柳豊、一風、称人、一林、一粒、友花、潮山、呉牛、判者夏雪を含めると十三人である。

今までに解読できた額中の俳句をあげてみよう。

亡き人の記念とも見む牡丹かな　大鰐　柳月
この道を問う人去りて夏涼し　阿弥陀川　紫紋
草の戸は今日も留居なり閑古鳥　同　梅左
落ち合ふて汲むや柳の下清水　同　友花
蓮の露ながめつ語るならいかな　同　春耕
はや三とせ立ちぬ鹿の子の乳ばな　同　呉牛
葉桜やうき身に早し立つ月日　孝子　一草

明治三十年代は、俳諧史では、新派と旧派の交替期であった。旧派とは、江戸時代の初期、かの俳聖、松尾芭蕉が確立した、わび、さびを基調とする、いわゆる蕉風俳諧の正統を継ぐ側であり、一方、明治三十年になって、正岡子規が俳句革新を唱え、リアリズム俳句としてさかんに発表した。この運動に組した俳人や作風を新派とよんでいる。旧派はいつしか新派に押され、やがて現代俳句につながることになる。

わが青森県の俳壇に、子規が提唱した新派俳句の影響が見られるのは明治三十一年、俳句結社無名会結成のあたりからであろう。

さらに、翌三十二年には、佐藤紅緑、木村横斜らの太平会結成によって、青森県における、俳句革新運動の拠点が生まれた。紅緑は、東京において、弘前出身のジャーナリスト陸羯南（くがかつなん）が主宰する新聞社、「日本」に務めたことがある。ここに正岡子規がいた。紅緑や子規の活動する舞台は、新聞「日本」であったため、彼等のグループを、〃日本派〃とよぶことがあるのはそのためである。

このように、青森県においても、すでに新派俳句の運動は始められていたわけだが、明治の末までは、大勢は旧派で占められていたと思う。それは、俳句の師匠が、幕末の教養を身につけた人ばかりで、蕉風の根強い信奉者であったからであると考えられる。阿弥陀川俳諧グループの師匠であった千葉卿々庵も、藩学稽古館において、かって文武の修行を受け、句仏仏から蕉風を伝受された人である。さらには、明治三十年代の、県内におけるいずれの俳句結社にも組していない。

したがって、正法院掲額に見るかぎり、明治三十年代の阿弥陀川の句風は、旧派に属していたことになる。

わたしは先に、文政八年に編さんされた、「俳句合浦名玉集」の中で中沢村の一虎、阿弥陀川村の九合。明和六年に書かれた「外が浜」中に阿弥陀川の蘭舟の句が集録されていることを知った。中沢の一虎は、天保四年の油川明誓寺掲額に

置く露に亡き名したわし蓮のうへ

と献句している。

「俳諧合浦名玉集」には、九合の、

払う間に袖は濡れゆき春の雪
細帯のめり通るなりはつ袷
葉桜や庵主は猫と眠り合い
水の音苔に沈んで暑さかな

が集録されている。また一虎は、

殿原の素足や三日の磯はしり
常盤木を力卿にやふじの花
旅の憂さ語りあますや木曾の秋

が集録されている。また嘉永四年編の「合浦遊魚集」には、九合の親里の文のケ条や二日灸

春宵や知る人に知る其価

が集録され、一虎の

二葉三葉残りて柳なお寒し

が集録されている。

これらの先輩の俳人と、明治期の俳人とが、同郷である故に、あるいは、作句のうえでの交渉があったかどうかについて調べることは、俳諧史研究上、きわめて価値ある問題である。

最近では昭和二十二年に、坂本太白（大博―現村長ら）の俳句結社、茜吟社が結成されていた。茜吟社は先輩俳人追悼法要会も催したそうで

あるから、わたしがあげた江戸時代の先輩俳人の研究もなされたことだろうと思う。

思うに、明和六年（一七六九）から昭和二十年にいたる間二百年、蓬田には雅人が絶えなかったことになろう。風雪に耐え、きびしい農耕や漁労にたずさわってきた村人が、いかにして俳諧をひねる心のゆとりを得たものだろうか。

生活とたたかいながら、執拗（しつよう）に心のゆとりを見出だそうとする祖先の、高い生活意識が、現在の村民に受けつがれているだろうか。

がらんとした広い本堂で、わたしはカメラをケースに収め、ノートを紙袋にしまった。そっとやっても、紙のガサガサという音が妙に高く聞こえる。再び庫裡に行き、謝意を述べて山門から出る。予想以上の資料収集ができたので満足だった。外はあいかわらず灰色の空から、重い濡れ雪がぼたぼたと落ちていた。庫裡の二階から和賛の声が低く流れていた。

（蓬田中学校教諭（青森県文化財保護協会会員））

蓬田村青年団体連絡協議会『村長と語る青年のつどい』を開催

私達が生まれ育った蓬田
海を赤く染める太陽
耳を澄ませば聞こえる潮騒
松をゆさぶる風のざわめき
春の日ざしに揺れる陽炎
そして土の香り

そんな中で私達の日々が過ぎて行きます。今回のつどいは『毎日の暮らしの中に地域の抱えている問題点を発見し、青年の意見を住みよい地域社会づくりの為に反映させよう』というテーマのもと二月二十四日中央公民館において開かれました。

話し合いは村の農業に始まり、生活環境、教育についてを村長と私達の質疑応答で進められました。農業に関しては後継者の間から村は米作りが主体であるが、青森米の評判が悪い。良質米生産対策としてどんな施策があるのかという質問が出ました。これに対して村長は米も商品の一つであること。今までは収量増収の為に新規開田と共に規模拡大を進めて来たが、これからは食味の方も向上させる必要があると述べました。又、大型農業機械を個人で買っている場合が多く不合理な面が見えるという意見に対しては、農業機械銀行といって大型農業機械所有農家が、機械のない農家の作業を委託し機械のフル活用を図る方法があると説明がありました。肉用牛生産振興計画については、資金、管理、技術者対策等について質問が出ました。これについては利子補給の点、村有牛の貸し付け制度、事業は農協とタイアップして行なうなど事業内容の説明がありました。

生活環境については今計画が組まれている農村環境モデル事業と、広域市町村圏で行っている糞尿処理、ごみ処理、広域消防について村長から説明があったあと、次のような質問が出ました。診療所に通う患者をバス輸送できないものか。出稼ぎなどにより消防体制が充分にとれていない点。火を消す消防より火を出さない為の消防対策を等々。

教育関係では村民大会が年々マンネリ化しつつあり盛り上りが足りない。ここいらで子供も大人も一体となった運動会・文化祭を開き村民ぐるみの憩いの場、郷土文化保存の場としてはどうかという提案がありました。

次代を担う者として私達青年をこの地域に対し常に関心の目を向ける必要があるのではないでしょうか。

村づくりと教育を語る村民集会

去る三月二日蓬田中学校において開催され、日頃本村社会教育発展にご協力を下さっている諸先生方はじめ各学級生婦人会など多数の村民が参加して研究討議されその目的は、十分に達成されました、これを機会に本村社会教育を一層盛り立てていきたいものです。

蓬田体協よりバドミントンクラブ員募集

あなたもやってみませんか！
スポーツを通じて
健康な体と明るい心を！

募集範囲―村内在住の青年（定時制生徒可）
練習日―毎週火・木・金
夜八時～九時半
練習場所―蓬田小学校体育館
会費―毎月一人三〇〇円（シャトル代）

お問い合わせ―蓬田村役場内
福田までTEL蓬田一番

水死事故危険個所の調査にご協力を

（蓬田駐在所だより）

これからは、日一日と雪も消え暖かさも増してきます。

それに伴って、子供達が、海、沼堤、河川等で遊ぶようになります。

警察では、子供達が、水辺に近よる前に、水死事故防止上の意味から危険個所を調査することにしています。

昨年の水死事故の状況をみますと一〇三名亡くなっていますが、それでも前の年に比べ六名少くなっています。特に、溜池や用水堰等での水死事故が七名も減っています。

これは昨年一月県内の貯水槽、古井戸、用水堰、溜池等の危険個所の調査を実施し、二五九個所の危険個所を抽出して、関係機関等の協力により、これに防護柵、立札、埋立等の防護措置を講じたり、危険個所に近づかないよう広報活動を積極的に実施した結果によるものとみられます。

一方、調査もれの個所、あるいは危険視されていなかった個所で事故が発生しています。

「命を大切にしよう」

この運動は昨年六月、県警察が中心になってすすめました。この運動を絶やすことはできません。

危険個所の調査は、昨年抽出した二五九個所の危険個所の再点検や、護岸、岸壁、河川、用水堰等あらたな危険個所について調査し、次のような措置を行なうことにしていますので、村当局ならびに、村民みなさんのご協力をお願いします。

一、施設の管理者等の協力を得て防護柵、立入禁止の立札、注意表示

等の措置を講ずる。

二、安全施設等防護措置に予算を伴うものについては、管理者等に予算措置を講ずるよう申し入れるとともに防犯協会等の協力のもとに早期に、ざん定措置を講じ、段階的に整備を促進する。

三、広報紙、有線放送等のほか、防犯協会、学校等に積極的に広報を図る。

四、関係機関を通じて、学童、幼児の水死事故防止の推進を申し入れる。

五、危険個所のパトロールを強め、水死事故の未然防止につとめる。

固定資産課税台帳　縦覧期間を延期

三月から四月に

固定資産（土地、家屋、償却資産）をおもちのかたに固定資産の価格などを確認していただくため、毎年三月一日から二十日まで固定資産名寄帳をお見せしていました。

ところで昭和四十九年分については家屋の建っている小規模住宅用地に対する税額の軽減を図るため地方税法の一部改正が予定されており、その法律の成立時期の関係で法定期間の縦覧が困難になりましたので四月に延期することになりました。

なお延期による四月縦覧期間の日程などにつきましては掲示板に公示致します。

▽　△

出稼文集「ぼくのお父さん」より

「お父さん」

蓬小六年　小鹿忠幸

ぼくのお父さんは東京に出かせぎに行っています。そして正月とお盆になれば帰って来ます。帰ってくればお父さんはぼくに『かだもんでけろ。』といいます。するとぼくは『うん』といいます。一時間ぐらいたってからお父さんは『あどいい。』といってぼくに百円くれます。ぼくはその百円をくれた時手にいっぱいひび割れがあったので、ぼくは心の中で『お父さんは一生けんめい働いているなあ。』と思いました。ぼくは大人になったらお父さんに負けないくらい働きたいと思います。そしてはやくお父さんを楽にしたいと思います。

「お父さん」

蓬小六年　福井一子

私のお父さんは今福島ではたらいています。私たちのために毎年出かせぎに行き汗を流していっしょうけんめいはたらいているのです。そんなお父さんに私はテレビを見ていると、テレビの番組を横取りされるのでお父さんをどなりつけたりするとお母さんにいつも、『お父さんははたらきに行くと好きなテレビも見られないんだから、家にいる時だけでもゆっくり好きな番組を見せなさい。』としかられます。

そんな時父がとてもかわいそうに思えます。だから私はお父さんが家にいる時は、お父さんがはたらきにいっている時のようにがまんするようにします。そして私も大人になったら、お父さんのようながまん強い人になりたいと思います。

「お父さん」

蓬小六年　船橋寿悟

ぼくのお父さんは北海道の滝川市に行って造林をしています。お盆に帰って来るとぼくはびっくりしました。それはぼくの手よりお父さんの顔が黒かったからです。

家に帰って来てからも休まず仕事をするお父さんを見ていると心配になりました。ぼくの目に見えない所で仕事をしているので、いつどんな所で何がおこるか知れないからです。これからもけがなんかしないように、いつまでも健康でいてほしい。

戸籍の窓口

（市町村名は本簿の表示です。）

◎お誕生おめでとうございます。

（一月受付分）

坂本幾子（敏二女）
高田佐慰子（隆広長女）
藤本満行（文雄二男）
稲葉春賀（亮兵衛三女）
坂本信孝（茂長男）
山谷孝容（勝雄長男）
八戸俊朗（生治二男）
佐々木移（忠光長男）
福井武亮（孫兵衛三男）
稲葉誠（繁広二男）
柿崎晃（昇長男）

（二月受付分）

坂本久美子（不二蔵長女）
柳谷功（利男二男）
森偉（規長男）
木戸武一（登志男二男）
佐井亮介（修次二男）
金枝博之（晃長男）
八戸千草（年美二女）
川内武（喜一二男）
森奈奈子（司二女）
七戸健一（祥一長男）
中村祐子（聡長女）
鳴海しのぶ（泰博二女）

◎ご結婚おめでとうございます。

（一月受付分）

（森沢）田柾代志サチ子（阿弥陀川・青森市）
（篠中）谷村良助秀子（青森市・蓬田）
（佐松）井坂昌吉子男（広瀬・埼玉県）
（折坂）笠本愛栄造子（青森市・中沢）
（八藤）幡井つよ子稔（高根・青森市）
（三越）田上砂政知子憲（瀬辺地・今別町）
（阿田）部村光春クレコ（青森市・中沢）
（佐々木森）松麗二子（青森市・阿弥陀川）
（細田）谷中秀鉄（蓬田・東京都）
（赤三）好坂信勝子悦（中沢・青森市）
（下吉）田山栄嘉正子（長科・蟹田町）
（八加）藤戸昭夫子（阿弥陀川・北海道）
（坂須）本藤広佳みや子（中沢・浪岡町）
（松谷）井キヨ通夫子（青森市・広瀬）

（二月受付分）

（飯森）田政綾義子（瀬辺地・阿弥陀川）
（石木）村橋盛昭子治（千葉県・蓬田）
（福相）坂井正陽子夫（中沢・広瀬）
（久直）馬慈静行子夫（瀬辺地・青森市）
（工飯）田藤政由美子三（八戸市・瀬辺地）
（佐吉）崎藤兼るつ子三（静岡県・蓬田）
（坂塙）本勝利マア江（中沢・茨城県）

◎お悔み申し上げます。

（一月受付分）

越田文平（瀬辺地）
北山りん（広瀬）
武井貞太郎（広瀬）

（二月受付分）

柿崎すよ（広瀬）
森光秀（阿弥陀川）

◆**戸籍の届出は正しく、すみやかに**

たいせつな戸簿は、みなさん方の届出に基づいて記載されます。届出は、正しく、すみやかにいたしましょう。